
レモンキャンディ

日向 銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レモンキャンディ

【Nコード】

N5899C

【作者名】

日向 銀

【あらすじ】

甘いキャンディに結ばれる恋っていうのも、良いもんだね。実はおねーさんと、もっと前に会ってるんだ。イチゴキャンディの続編。もう一つのキャンディーの話。

（前書き）

これはイチゴキャンディの続編です。

これを読む前にイチゴキャンディを読んでくださった方が、より楽しめるかと思います。

あの時、俺は見た。

日の傾いて、影が長くのびる。

その影の先で。

勉強ばっかして、どうせプライドの高い奴らの集まる、最低な学校。そこに転校する事になった哀れな俺の目の前で、その学校の生徒が、小さな子供たちとサッカーをしているのを。その後、公園の掃除をし出したのを。

「ねえ！その君！」

女がこちらの視線に気づき手招きする。

帰ろうかとも思ったが、なんとなく女の方に足をむけた。

「なに？」

「一緒にやる？」

「何を」

「掃除とサッカー。」

何を考えてるんだこいつ。

俺なんか誘う必要無いのに。

…馬鹿みたい。

「……やんない。」

「あそ。残念！」

「……じゃ、俺はこれで。」

「あ、君。これあげるよ、レモンキャンディ。」

でも、そう言って笑った女の顔が、頭から離れなかった。

学校を見学する日。

校長の配慮で、夏休みの補習中の学校を見させてくれる事になった。に興味の無い俺は、1人で大丈夫だと言って、案内の先生を振り払い、学校内を探索した。

そして屋上を見つけた。

空はキレイに青くて、雲がゆっくり流れてた。

太陽の傾きで出来た影に身をうずめて、俺はしばらく寝ていたんだと思う。

気付けば、影は無くなっていた。

真上にある太陽をかるく睨むと、暑くなった屋上を後にする。

階段をゆっくりと降りると、下からパタパタと足音がした。

俺は見つからないように、そっと下を伺った。

あの人だ。

後ろ姿を追って教室の前まできた。

鍵つけっぱなしだし…。

口角が上がるのがわかる。

おもむろに伸ばした手を鍵にかけ、机の中を漁るあの人を横目に抜き取った。

それから逃げた。

見える距離を保って、ずっと逃げた。

あの屋上へ行こう。

そう、ふと思った。

屋上につくと、俺は身を隠した。

どこから飛んできたのか、シートがふわふわと舞っていた。

そのシートがフェンスを越えた時、あの人 came。

「おおお落ちた！」

俺は腹を抱えて笑った。

今もまだ食い入るように見る彼女に声をかけた。

レモンキャンディのお返しに、イチゴキャンディを添えて。

「れん？」

ゆっくりと目を開ければ、そこにしぐれ先輩が覗き込むようにして立っていた。

「おねーさん、パンツ見えるよ。」パツとスカートを抑えて俺を睨む先輩に声を殺して笑いながら、俺は体を起こした。

「で、何かよう？」

「何かようって…、れんが呼んだんでしょ。」

「そうだった？」

先輩は俺の横に腰掛けた。

放課後の中庭は人も少なく、クラブの声しか聞こえなかった。

「昔を思い出してた。」

「昔？」

「俺とおねーさんの出会い。」

「屋上の？」

俺はただ首を振った。

この人忘れてんだよね。

レモンキャンディをくれた日を。

「ねえ！その君！一緒にやる？掃除とサッカー。」

俺は先輩に言われたセリフを思い出しながら、教えてあげた。

ハッと、先輩が息を飲んだのがわかった。

「レモンキャンディ。」

俺はさらに続けた。

「わかった？」

「あ…。あん時の…。」

「普通わかるでしょ。」

ため息をついたら、先輩はにっこり笑った。

「れん、変わったね。」

俺が、変わった？

ここ何ヶ月で身長がそんな伸びたわけでもないし、顔も変わってないけど。

俺は怪訝な目を先輩にむける。

「出会った時は、つまんなそうな目してた。屋上の際はわくわくしてたし、今はすごく楽しそうな目してる。明るくなったね。」

それはたぶん、先輩が俺を変えたんだね。

相変わらずこの学校を好きにはなれないけど、それでも来れて良かったと思ってる。

それは先輩のおかげだから。

「おねーさん、俺、あんたのこと好きみたい。」

「…しぐれとお呼び。」

ふんぞりかえった先輩を見て笑いながら、抱きしめて耳元で呟く。

「しぐれ、好きだよ。」

「それ、反則だよ…。」

顔を真っ赤にしてるしぐれを見て、また笑いがこみ上げる。

なんて面白い人なんだろう。

なんて可愛い人なんだろう。

「私だって好きだよ、れんのこと。」

「うん、知ってる。」

「自惚れないでよっ」

俺の腕の中で暴れるしぐれにキスをすれば、顔が茹で蛸のように赤く染まった。

「よ、呼び捨て禁止だからね！先輩ってつけなさい。」

「ヤダ。」

「ヤダじゃないっ」

「じゃあ、レモンキャンディをくれたらね。」

「そ、そんなの持つてるわけないじゃない…。」

「しぐれ。」

「何？」

顔だけを動かして、俺のほうを向いたしぐれを見つめた。

「屋上の時、俺を幽霊だと思ったって本当？」

ギクッ

つて口に出して言う人初めて見た。

しぐれはあからさまに目をそらした。「そんな事誰から聞いたのよ

！」

夕陽先輩から。

だけどそんな事どうだっていい。

「しぐれ酷い。最低。だから罰として、キスして良い？」

しぐれはまた顔を赤くした。

「無理ムリむり！」

「レモンキャンディをくれたら、やめてあげる。」

「だから無いってばあ…。」

逃げようとするしぐれの顎を持ち上げてキスを落とす。

「ごちそうさま。」

日が傾いて影がのびる。

出会った時を思い出しながら、口の中でレモンキャンディを転がした。

「俺、レモンキャンディの方が好き。」

「私はイチゴキャンディの方が好き。」

イチゴキャンディを口の中で転がしてしぐれが言った。

甘いキャンディに結ばれた恋つてのも、これからが甘くなりそうで
良いんじゃない？

俺はしぐれの横で密かに笑った。

（後書き）

イチゴキャンディの続編でした。

どうしようか悩んで、悩んで…

悩んだ結果がこんな感じになりました。

感想、評価をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5899c/>

レモンキャンディ

2011年1月30日15時09分発行